

『はるか狂乱の群れを離れて』 試論
—ダーウィンの「性選択」とシェイクスピアの『じゃじゃ馬馴らし』
の観点からオウクとバスシバの結婚を読み直す—

鈴木 淳*

An Essay on *Far from the Madding Crowd*:
Rereading the Marriage between Oak and Bathsheba from the
Viewpoints of Darwin's "Sexual Selection" and Shakespeare's
The Taming of the Shrew

Jun SUZUKI *

Abstract

The main aim of this essay is to re-examine the marriage between Oak and Bathsheba which happens at last in Hardy's *Far from the Madding Crowd*. The marriage has been regarded as a happy ending after experiencing problems and some critics have said that Hardy has suggested a new type of marriage based on "good fellowship," not on passion. However, in the text, the heroine selected her first partner Troy as if she followed Charles Darwin's theory of "sexual selection." Her final partner Oak is rather imperfect in light of the Darwinian view. In this essay, I am going to analyze Bathsheba's selection of her husband using Darwin's theory of sexual selection and conclude her final choice and remarriage to Oak as ironical one from the viewpoint of Darwin's theory and also as parody in light of William Shakespeare's *The Taming of the Shrew*.

序

トマス・ハーディ(Thomas Hardy)の『はるか狂乱の群れを離れて』(*Far from the Madding Crowd* 1874)については、先行研究の多くがヒロインであるバスシバに注目してきた。ピーター・J・カサグランデ(Peter J. Casagrande)は、テキストでは「攻撃者や誘惑者という慣習的に男性の役割」(Casagrande 62)を担う「バスシバには本質的に欠点があるというハーディの見解」(Casagrande 52)が示されていると述べ、一方で、ペニー・ブーメラ(Penny Boumelha)は、男性たちに「自分のことを望むようにけしかけようとする」(Boumelha 33)バスシバの行動について、バスシバの「オウクの気を惹こうとする態度やボールドウッドへのヴァレンタインのメッセージは彼女の性の率先的行動、かつそれを隠そうとした行動である」(Boumelha 33)と述べている。では、そのバスシバの男性への「性の率先的

な行動」とは何なのか。まずは、それを明らかにしてから議論を始めることが重要だと思われる。

本論では、ブーメラの指摘するバスシバの「性の率先的行動」を、チャールズ・ダーウィン(Charles Darwin)の「性選択」("sexual selection")の理論との関係で解釈していく。つまり、バスシバは、オウク、ボールドウッド、トロイという三人の男性たちの争いのなかで、最も適した夫を探す性選択を行っていたのだ。しかしながら、本論では、これまではハッピー・エンドと解釈されてきた最終的なバスシバとオウクとの結婚について、ダーウィンの性選択の観点から新たな読みを提示する。そうすることで、バスシバとオウクの結婚が「ハッピー・エンドなのかどうか」という従来からの問題についても新たな解釈が生まれる。というのも、最後にバスシバが選んだオウクの夫としての魅力や資質は、ダーウィンの理論の基準からすると不十分である。また、求婚の方法

についても、求婚したのはバスシバであり、ダーウィンの理論とは逆である。最終的には、オウクとバスシバの結婚について、ダーウィンの「性選択」の理論からするとアイロニカルであり、またオウクの妻の「飼い馴らし」については、ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare)の『じゃじゃ馬馴らし』(*The Taming of the Shrew* 1623)のパロディとしての解釈を提示してみたい。

I ダーウィンの性選択とオウク

従来から、このハーディの小説は、ヒロインであるバスシバとオウク、ボールドウッド、トロイという三人の男性をめぐる関係という観点から捉えられ、最終的なオウクとバスシバの結婚が果たしてハッピー・エンドなのかどうかについて議論されてきた。オウクとバスシバの結婚をハッピー・エンドとして捉える先行研究では、主にバスシバがオウクを選んだ理由を、オウクの農場経営者としての資質や土地管理能力などにおける成長として論じるものが多い。たとえば、メリン・ウィリアムズ(Merryn Williams)は、テキストで登場人物たちの存在が「仕事」という面から定義されると述べている¹⁾。

The characters are defined in terms of their work more clearly than in any of the earlier novels: Gabriel and Bathsheba are skilled land-workers or overseers; Boldwood is a respectable gentleman-farmer; Troy is a drifting soldier who could have done much better things with his life. All of them are subordinated to the novel's central preoccupation – the care of the land and flocks, and the maintenance of the community in a condition of health. Individuals are characterized as good or bad directly through their contributions to these ends.

(Williams 130)

ウィリアムズによれば、登場人物たちへの判断は土地や家畜、そして共同体の健康維持への貢献度によってなされるという。そのように考えると、オウクとバスシバの結婚は、「あたかも村に望ましい規範を回復させた」(Williams 135) ハッピーエンドと言えるかもしれない。

たしかに、テキストの最後だけを取り上げてオウクとバスシバの結婚を考察するのであれば、オウクの農場経営者としての資質や土地管理能力は、バスシバやウェザーベリー(Weatherbury)の

共同体にとって結婚理由として十分に理にかなっていると思われる。しかしながら、その結婚はハッピーエンドなのだろうか。実際に、H・M・ダレスキ(H. M. Daleski)はバスシバの結婚には「何か欠けている」(Daleski 82)と述べている。また、同じく自らの論でダレスキの意見を取り上げている筒井香代子は、「ハーディは、幸福な結末を提示したかに見せて、その幸福が不完全なものであることを表している」(筒井 150)としている。

これは、ある意味では当然の結果である。その問題を考えるにあたって重要なのは、バスシバのオウクとの結婚が彼女の初婚ではなく「再婚」だということである。実際、バスシバは最初にトロイを選んでいるため、バスシバのオウクに対する選択の理由は後付けであり、農場経営や土地管理能力などの外的要因をバスシバの結婚の第一の理由とすることは正しくない。はっきりしているのは、もともとのバスシバの夫選択の基準が「男性としての魅力があるかどうか」であり、それはあたかもダーウィンの性選択の判断基準に拠っていることである。したがって、そこまで遡って問題を考察し直すことが重要なのだ。

では、ダーウィンの「性選択」の理論とはいかなるものであろうか。ダーウィンは、『種の起源』(*The Origin of Species* 1859)のなかで、動物の性選択について「雌をめぐる雄たちの争い」(*The Origin of Species* 136)であると述べ、その勝敗はそれぞれの「特別な武器」(*The Origin of Species* 136)があるかどうかによると述べる。ダーウィンは様々な動物の雄の争いについて述べているが、なかでも興味深いのは、鳥についての記述である。鳥の雄たちは自分たちの「派手な羽を雌に見せながら奇妙な動き」(*The Origin of Species* 137)をする。その結果、雌は「最も魅力的な雄を選択する」(*The Origin of Species* 137)のである。実は、バスシバの行動はこのダーウィンの理論に基づいている。バスシバにとって重要なのは動物的な価値基準であり、男性としての魅力があるかどうかなのだ。したがって、後に何度もバスシバを実質的に助け、羊たちの健康や農場の作物を管理する能力の高いオウクであるが、テキストで次のように語られていることからわかるように、オウクは周りから大人の男性として見られてはいない。

In his face one might notice that many of the hues and curves of youth had tarried on to manhood: there even remained in his remoter crannies some relics of the boy.

(Far from the Madding Crowd 52)

オウクの表情は、大人に達していない「若者」のそれであり、「少年っぽさ」さえ残っている。他にも、オウクに関する描写の多くが、「健全な判断」(Far from the Madding Crowd 51) や「適切な服装」(Far from the Madding Crowd 51)、そして「謙虚」(Far from the Madding Crowd 52) であるとされている。これは、一見すると何も問題ないように見える。だが、面白いことに、テキストでは、これらは「欠点」(Far from the Madding Crowd 53) であるとも述べられている。つまり、ダーウィンの動物的な性選択の基準に照らしてみれば、オウクの資質はまったく女性の気を惹かないものであり、そのため、テキストでオウクはわざわざ「独身」(Far from the Madding Crowd 53) であると述べられるのだ。

一方で、バスシバはどのような女性かと言えば、自らについても動物的な判断基準である美しさを一番に気にかける女性である。バスシバは、鏡を見て、将来の男性たちとのドラマを思い描きながら微笑むのだ。

She simply observed herself as a fair product of Nature in the feminine kind, her thoughts seeming to glide into far-off though likely dramas in which men would play a part – vistas of probable triumphs – the smiles being of a phase suggesting that hearts were imagined as lost and won.

(Far from the Madding Crowd 55)

バスシバは、内心常に夫を探している。だが、バスシバの選択基準からすると、オウクは問題外であり、候補には入っていない。その証拠に、通行料のことでバスシバの荷馬車がトラブルに巻き込まれ、オウクがその場を解決した際にも、バスシバはオウクを見ると、感謝の言葉もなく通り過ぎていく。というのも、バスシバにとって、オウクは中途半端であり、まったく気にならない男性だったからである。

Gabriel's features adhered throughout their form so exactly to the middle line between the beauty of St John and the ugliness of Judas Iscariot, as represented in a window of the church he attended, that not a single lineament could be selected and called worthy either of distinction or

notoriety.

(Far from the Madding Crowd 55)

語り手は、オウクに関して、あたかもダーウィンの動物に関する性選択を意識しているかのように、「美しさと醜さの間」で、これと言って目を引くこともないため、「選択され得ない」ことを述べる。

さらには、オウクがバスシバに相手にされていないことは、焚火のエピソードからもわかる。あるとき、オウクは小屋で換気用の穴をふさいだまま火を焚いて眠ってしまい、危うく死ぬところだったところをバスシバに助けられる。バスシバが看病のために自分の膝の上にオウクの頭をのせている間にオウクはバスシバの手を取るが、「小心者」(Far from the Madding Crowd 72) と形容されるオウクは、それより先に進むことができない。逆に、バスシバは「手にキスをしたかったらどうぞ」(Far from the Madding Crowd 72) と言い、オウクが「そんなこと思ってもいなかったけど、それじゃあ」(Far from the Madding Crowd 72) と言うと、バスシバは手を引く。このように、オウクは、自分の小屋、いわば自分の巢に入ってきた雌によってからかわれ、そして相手にされず逃げられるのである。

II 性選択とボールドウッド

オウクがダーウィンの動物的な性選択の基準において女性から夫候補として相手にされないことについては確認した。それでは、次に、ボールドウッドについて確認してみたい。注目すべきは、オウクと異なり、ボールドウッドについての周りの評価は、「紳士」であり、しかも「ハンサム」であるというものである。

'Who is Mr Boldwood?' said Bathsheba.

'A gentleman-farmer at Little Weatherbury.'

'Married?'

'No, miss.'

'How old is he?'

'Forty, I should say – very handsome – rather stern-looking – and rich.'

(Far from the Madding Crowd 124)

バスシバは、女召使であるリディーにボールドウッドが結婚しているかどうか尋ねる。さらに、リディーからボールドウッドがハンサムだという情報を得る。ここで、バスシバは明らかにオウクとボールドウッドを比較している。実際に、結婚

の話題になると、バスシバは、オウクのことを思い出し、リディーに対して「彼は私には不十分だったわ」(*Far from the Maddening Crowd* 126) と言うのである。

しかしながら、ボールドウッドに関心を持つバスシバにとって、問題は、ボールドウッドがこれまでも多くの女性から求婚をされながらもすべて断り続けているという事実であった。

‘Never was such a hopeless man for a woman! He’s been courted by sixes and sevens – all the girls, gentle and simple, for miles round, have tried him. Jane Perkins worked at him for two months like a slave, and the two Miss Taylors spent a year upon him, and he cost Farmer Ives’s daughter nights of tears and twenty ponds’ worth of new clothes; but Lord – the money might as well have been thrown out of the window.’

(*Far from the Maddening Crowd* 125)

リディーは、バスシバに「ボールドウッドほど女性にとって見込みのない男性はいなかった」と言う。これまでどんなに女性たちがボールドウッドの気を惹こうとしてもすべて失敗に終わったのである。バスシバの場合も同様で、実際に、カスターブリッジ(Casterbridge)の穀物市でバスシバが周りの男性たちの視線を集めるなかで、ボールドウッドだけがバスシバを見ようとしない。バスシバにとって、男性の視線を集めることは「女王」(*Far from the Maddening Crowd* 141) としての「勝利」(*Far from the Maddening Crowd* 141) であった。男性たちに見られることで、最も魅力的な男性に勝ち取られることを重視するバスシバにとって、ボールドウッドが自分のことを見ようとしないことは非常に重大な問題である。というのは、男性に見られなければ、男性同士のライバル同士の争い、そして結果としてのバスシバによる性選択も何も始まらないからである。

おそらく、バスシバがボールドウッドにヴァレンタインのいたずらをしたのには、自分を「あたかも薄い空気であるかのように」(*Far from the Maddening Crowd* 143) 見ることなく通り過ぎるボールドウッドに「腹を立てていた」(*Far from the Maddening Crowd* 142) ことが関係していた。ボールドウッドが女性に関心を示さないのは、噂では過去の失恋が原因だという。つまり、バスシバは、ボールドウッドが自分の姿を見さえすれば、自分に関心を持つだろうと考えた。そのため、バスシ

バは、リディーと一緒に、「結婚してほしい」(*Far from the Maddening Crowd* 147) と書いたヴァレンタインの贈り物のいたずらで、ボールドウッドの潜在的な熱情を刺激しようとしたのだ。

しかし、バスシバは性選択の対象を間違えた。語り手は、ボールドウッドを刺激したことについて、「バスシバが何も考えずに行為を行った」(*Far from the Maddening Crowd* 148) と語る。差出人不明のヴァレンタインの手紙を受け取った際には、ボールドウッドは半信半疑で、しかも鏡に映った自分を見て自信がなくなる (*Far from the Maddening Crowd* 151)。だが、バスシバがヴァレンタインのメッセージの送り主だということを知り、バスシバを初めて見たときのボールドウッドは、長い眠りから覚めてイヴを見たときのアダムにたとえられる (*Far from the Maddening Crowd* 167)。バスシバは、ボールドウッドが自分のことを隅から隅まで見ることに「勝利」(*Far from the Maddening Crowd* 169) を感じる。しかしながら、語り手はここでバスシバの勝利を非難する。バスシバは「小さな始まりによる後の事の重大さに対して無関心」(*Far from the Maddening Crowd* 168) だからである。というのも、ボールドウッドの性格は普通ではない。実際に、ボールドウッドは「感情に支配されやすい」(*Far from the Maddening Crowd* 171) と語られる。ボールドウッドの見た目の「落ち着き」は、それとは「逆の力との完全なバランスを保っている」だけであって、「均衡が乱されると一気に極端に走る」のである (*Far from the Maddening Crowd* 171)。

ここで面白いのは、テキストでは、バスシバとボールドウッドのロマンスの始まりに対して、植物へのたとえが用いられていることである。

Bathsheba was far from dreaming that the dark and silent shape upon which she had so carelessly thrown a seed was a hotbed of tropic intensity.

(*Far from the Maddening Crowd* 171)

語り手は、バスシバが「熱帯の激しさを持つ苗床」に知らずに種をまいたと語る。さらには、この後で、語り手は、もしバスシバが「良くも悪くもボールドウッドへの現在の自分の力を知っていたならば、自分の責任の大きさに震えただろう」(*Far from the Maddening Crowd* 171) と語る。だが、「彼女の現在にとっては幸運であり、未来にとっては不幸なことに、彼女の理解はまだ彼女にボールドウッドがいかなる人物なのかについて示してはいなかった」(*Far from the Maddening*

Crowd 171) ののである。

III 性選択とトロイ

バスシバにとって、「結婚してほしい」というヴァレンタインのメッセージは、ボードウッドが自分のことを見るように仕向ける性選択のための第一段階であり、夫選択の決定ではない。見極めは今からなのである。当然ながら、ボードウッドが候補者から落選する可能性もある。実際に、バスシバを「理想化」(*Far from the Maddening Crowd* 175) し、想像のなかで「神格化」(*Far from the Maddening Crowd* 175) するボードウッドとは逆に、バスシバは次第にボードウッドに対して興味を失っていく。バスシバに対してヴァレンタインの手紙を理由に結婚を迫るボードウッドに対して、バスシバはボードウッドのことを次のように見ている。

Bathsheba knew more of him now; he had entirely bared his heart before her, even until he had almost worn in her eyes the sorry look of a grand bird without the feathers that make it grand.

(*Far from the Maddening Crowd* 211)

バスシバの中で、ボードウッドは、もはや自分を大きく見せる羽という武器をもたない惨めな鳥となっている。重要なのは、ここで見事な羽をもつライバル男性トロイが現れることである。バスシバとトロイの出会いの場面は、まさに動物の雌の注意を引く雄を象徴するかのようであった。バスシバが土地管理人の仕事である農場の見回りをしているとき、暗闇の中で彼女のスカートにトロイの拍車が引っ掛かる。その際、テキストで示されるのは、トロイの軍服の鮮やかな「真鍮と深紅」の色だった。

The man to whom she was hooked was brilliant in brass and scarlet. He was a soldier. His sudden appearance was to darkness what the sound of a trumpet is to silence.

(*Far from the Maddening Crowd* 214)

トロイは、バスシバのスカートを切って拍車から外す (*Far from the Maddening Crowd* 215)。その際、トロイはバスシバの手に触れる。また、バスシバの顔を見たトロイの「美しい」という言葉に対して、バスシバは、困惑して顔を赤らめる (*Far from the Maddening Crowd* 215)。

バスシバは、その夜にリディーにトロイについて尋ねる。バスシバは、その際、トロイを「ハンサム」(*Far from the Maddening Crowd* 217) だと言う。明らかに、バスシバはトロイに男性としての興味を持っている。それには、トロイが「称賛されることへの欲求」(*Far from the Maddening Crowd* 218) が強いバスシバに対してその美しさを口にしたことも関係している。一方で、語り手は、ボードウッドの失敗をボードウッドが一度もバスシバに美しいと言ったことがないことだと語る (*Far from the Maddening Crowd* 218)。

バスシバをめぐるボードウッドとトロイの間の性選択のライバル争いは、トロイによる「刀剣の訓練」のエピソードにより、決定的なものとなる。トロイとの会話のなかで、バスシバが刀剣の訓練を「見てみたい」(*Far from the Maddening Crowd* 235) と言い、トロイがバスシバの前で一連の技を披露するのだ。従来から、トロイの刀剣の訓練は「性的な重要性を伝える象徴的なアクション」(Daleski 70) であると解釈されてきた。バスシバに見事なまでのさまざまな剣さばきを見せるトロイは、最後に、バスシバの髪の毛を切り落とす²。

‘That outer loose lock of hair wants tidying,’ he said, before she had moved or spoken. ‘Wait: I’ll do it for you.’

An arc of silver shone on her right side: the sword had descended. The lock dropped to the ground.

(*Far from the Maddening Crowd* 240)

ボードウッドが女性の気を惹く羽という武器をもたない一方で、トロイは見事に刀剣という自分の武器を見せびらかす。さらに、トロイはバスシバにキスをして去っていくのである。

ダレスキは、この刀剣の訓練がトロイに関してオウクやボードウッドとの対照を顕著に表すとし(Daleski 71)、バスシバがここで「征服された」としている (Daleski 71)。実際に、バスシバはトロイを熱烈に愛するようになり、ボードウッドに対して結婚を断る手紙を書く (*Far from the Maddening Crowd* 251)。一方、バスシバの心変わりに気が付いたボードウッドは、バスシバに対して次のように非難の言葉を浴びせる。

‘All the time you knew – how very well you knew – that your new freak was my misery. Dazzled by brass and scarlet – O, Bathsheba – this is woman’s folly indeed!’

(Far from the Madding Crowd 262)

ボールドウッドは、バスシバがトロイの軍服の鮮やかな色に目が眩んだとして非難する。このボールドウッドの非難の言葉は、テキストにおいて性選択の争いの基準がまさにダーウィンの動物における性選択の基準に置かれていることを示している点で興味深い。女性の目を引く羽を持たないボールドウッドは、トロイの軍服に敗北したのだ。

IV もう一つの性選択とバスシバ

バスシバとトロイは結婚する。しかし、バスシバとトロイの結婚生活は早々と破綻する。一つには、バスシバはトロイの時計の裏側のケースの中に自分のものではない女性の髪の毛がしまっているのを見つけたからだ (*Far from the Madding Crowd 331*)。つまり、トロイには、バスシバ以外の女性との何らかの秘密があるのである。実際に、トロイは、本当はファニー・ロビンという女性と結婚するはずだったが、バスシバと結婚したのである。ファニーからするとバスシバとトロイに裏切られた形になる。バスシバにトロイを奪われたファニーは、カスターブリッジの救貧院で死を迎える。

しかしながら、面白いのは、ハーディがテキストの第43章のタイトルを「ファニーの復讐」(*Fanny's Revenge*)としたことである。これはどういうことだろうか。ダーウィンは、動物の性選択において、争いの結果「求婚するのは雄」(*The Descent of Man 408*)であり、最終的にパートナーを「選ぶのは雌」(*The Descent of Man 409*)であると述べている。だが、ハーディのテキストでは、男性同士による一人の女性の奪い合いだけでなく、女性同士による一人の男性の取り合いが起こるのである。ファニーは、死んだ後に、今度はバスシバからトロイを奪い返す。それには、ファニーがトロイとの間に赤ん坊を出産していたことが関係していた。トロイが棺の中に眠るファニーと自分たちの赤ん坊を見たとき、トロイは優しくファニーの遺体にキスをする。それを見たバスシバは、突然気も狂わんばかりに嫉妬してトロイに自分にもキスするように言う。バスシバは、自分の「ライバル」(*Far from the Madding Crowd 361*)であるファニーよりも自分の方がトロイを愛していると言う。しかし、トロイは、バスシバに「君にキスはしない」(*Far from the Madding Crowd 360*)と言い、バスシバを払いのける。その理由は、ファニーの方がトロイにとって「重要な存在」だからだと言う。

‘Ah! Don’t taunt me, madam. This woman is more to me, dead as she is, than ever you were, or are, or can be. If Satan had not tempted me with that face of yours, and those cursed coquetries, I should have married her. I never had another thought till you came in my way. Would to God that I had; but it is all too late! I deserve to live in torment for this!’ He turned to Fanny then. ‘But never mind, darling,’ he said; ‘in the sight of Heaven you are my very, very wife!’

(Far from the Madding Crowd 361)

ここでトロイがファニーをバスシバよりも「重要」であり、「本当の意味での妻」であると言うのには、おそらく二人のトロイとの関係の持ち方の違いを示唆している。つまり、トロイとファニーの間には子どもがいたが、トロイとバスシバの間にはそのような関係はなかったということだ。この点については、ダレスキの「バスシバの性に関する反応の悪さがトロイに自分たちが本当に結婚していないと感じさせている」(*Daleski 78*)という指摘が重要である。

こうして、一度はトロイをバスシバに奪われたファニーであるが、死後にトロイを奪い返し、「復讐」を遂げた。それは、バスシバにとっては、トロイをめぐる女性同士の性選択の争いにおける敗北だった。トロイは、バスシバよりもファニーを選んだのである。

V ダーウィンの性選択のアイロニカルな結末、そしてパロディとしての結婚

トロイは、バスシバのもとを去り、バドマス (*Budmouth*)へ向かう。その後しばらくして、トロイが海で溺死したという噂が流れる。トロイの服だけが見つかったのだ。実際は、トロイは、海で泳いでいて流されたところを船のボートで救助され、アメリカで生活していた。だが、そのことを知らないバスシバは、カスターブリッジでトロイの溺死の話を聞いたときに、ショックで倒れる。そのときバスシバの体を支えたのがボールドウッドである。ライバルが死んでいなくなったことを知ると、ボールドウッドの目には「奇妙な炎が灯る」(*Far from the Madding Crowd 387*)。ここから再びボールドウッドのバスシバへの求婚が始まるのだ。

ボールドウッドは、トロイの死を理由にバスシバに対して猛烈に結婚を迫る。もはや自分のライバルはいない。さらには、バスシバの自分に対す

る同情心や過去のいたずらへの償いの感情のために、ボールドウッドのバスシバとの結婚の期待は一層大きく膨らむ。ボールドウッドは、バスシバに対して将来的な結婚を約束させようとする。ボールドウッドのあまりに興奮した声のトーンにバスシバは「恐怖」(*Far from the Madding Crowd* 413)を感じながら、クリスマスまでには結婚の約束をすると言う。

バスシバとの結婚をほぼ確実にしたボールドウッドであるが、面白いのは、ここでもテキストではダーウィンの性選択を意識しているかのような描写が見られることである。というのは、クリスマス・イヴにパーティを開く計画を立てるボールドウッドは、カスターブリッジから仕立屋を呼び、「新しいコート」の試着をしていた。

Boldwood was dressing also at this hour. A tailor from Casterbridge was with him, assisting him in the operation of trying on a new coat that had just been brought home.

Never had Boldwood been so fastidious, unreasonable about the fit, and generally difficult to please. The tailor walked round and round him, tugged at the waist, pulled the sleeve, pressed out the collar, and for the first time in his experience Boldwood was not bored.

(*Far from the Madding Crowd* 420)

ボールドウッドがコートを気にするのは、もちろんバスシバの気を惹くためである。それはあたかもダーウィンの性選択における雄の鳥の羽を示しているかのようだ。さらに、密かにダイヤの指輪を用意しているボールドウッドは、自分の勝利を確信しているのである。

一方、オウクは、ボールドウッドのバスシバへのあまりにも強い熱情に不安を感じ、ボールドウッドに「あまり期待しない方がいい」(*Far from the Madding Crowd* 421)と忠告する。このオウクの不安は的中する。というのは、実は、トロイがアメリカから戻ってきていた。しかも、トロイは、ボールドウッドとバスシバが一緒にいるところを見て、再びバスシバを「自分のもの」(*Far from the Madding Crowd* 407)と主張したくなるのだ。このボールドウッドとバスシバの間でのほぼ結婚が約束された状態でのトロイの再登場という状況は、実は、ダーウィンの性選択の理論にもそれに近い文章が見られる。

When two males contend in presence of a single female, the victor, no doubt, commonly gains his desire; but some of these battles are caused by wandering males trying to distract the peace of an already mated pair.

(*The Descent of Man* 316)

いわばトロイは、「つがいとなったペアの心の平穩を乱そうとしてさまよう雄」である。ボールドウッドは、トロイによって再びバスシバを奪われそうになる。トロイは、変装してボールドウッドのクリスマス・イヴのパーティにやってくる。バスシバがトロイに気が付いて青ざめる一方で、トロイに気が付かないボールドウッドは、自らトロイに家に入ってくるように促す(*Far from the Madding Crowd* 438)。ボールドウッドは、自分の巢にライバルを招き入れてしまうのだ。正体を明かし、笑い出すトロイによろやく気が付いたボールドウッドは、絶望して狂気となる。トロイがバスシバを連れ去ろうとしたとき、バスシバは悲鳴を上げる。その瞬間、銃声が轟き、トロイは倒れる。ボールドウッドが、銃という武器を使ってバスシバをめぐるトロイとの争いに終止符を打ったのだ。しかし、トロイの殺害は犯罪である。自分も銃で自殺しようとするが止められたボールドウッドは、バスシバの手にキスすると、その場から姿を消し、自らそのままカスターブリッジの刑務所へと向かうのである。

こうして、テキストで起きていたバスシバをめぐるオウク、ボールドウッド、トロイという三人の男性の争いが終わる。ただし、実際にライバルとして争っていたのは、ボールドウッドとトロイの二人であり、オウクとは言えば、どちらとも直接は争っていない。むしろ、争いをあきらめていたと言ってもよいかもしれない。だが、最後にバスシバと結婚するのは、ライバルと争わなかったオウクである。結果的に、バスシバにはテキストの論理が基づいていたダーウィンの性選択の選択基準とは正反対の相手だけが残ったのだ。

また、オウクとバスシバの結婚における求婚についても、ダーウィンの理論とは逆である。ダーウィンの理論では求婚するのは雄であったが、ハーディのテキストでは、女性であるバスシバがオウクの家に行き、男性に結婚を迫る形となる(*Far from the Madding Crowd* 458)。この経緯は、唯一残ったオウクまでがバスシバのもとから去るつもりだと言い出したからであった。オウクは、イギリスを離れ、カリフォルニアに向かう計画だと言う(*Far from the Madding Crowd* 453)。このとき、バスシバは、オウクに見捨てられたと思

う。オウクから雇用契約更新を断る手紙を受け取ったとき、バスシバは泣き叫んでオウクの家へ急ぎ、その結果、二人は結婚することになるのである。つまり、オウクとバスシバの結婚には、それまでテキストの論理が基づいてきたダーウィンの性選択の理論が全く関係ないのだ。こうした結婚は、果たしてハッピー・エンドと言えるのだろうか。

テキストでは、語り手がオウクとバスシバの結婚を「友情」(*Far from the Madding Crowd* 458)による結婚と言い、それをあたかもダーウィンの性選択を意識するかのように「熱情」(*Far from the Madding Crowd* 459)と対比して、肯定的に評価する。批評の中にも、同じく友情による結婚を新しい結婚の形として肯定的に論じているものも多い³。しかしながら、テキストのバスシバの次の言葉からは、彼女の結婚の理由が性選択の対象が自分の周りからいなくなっていくことへの恐怖にあったのではないかと思われる。

‘You ought not to have sent me that harsh letter this morning,’ she interrupted. ‘It shows you didn’t care a bit about me, and were ready to desert me like all the rest of them! It was very cruel of you, considering I was the first sweetheart that you ever had, and you were the first I ever had; and I shall not forget it!’

(*Far from the Madding Crowd* 458)

バスシバは、他の男性たちと同じく、オウクが自分のことを見捨てるつもりだったと非難する。だが、少なくともボールドウッドやトロイは、バスシバを見捨てたのではない。二人はバスシバの愛情を手に入れようとして命を懸けて争ったのである。また、テキストの前半部分で、オウクに「あなたに私を飼い馴らすことができないことは、私には分かっているわ」(*Far from the Madding Crowd* 80)と言い、あれほどオウクを相手にしてこなかったバスシバが、最後にオウクを「自分の最初の恋人だった」と言うのは、果たして本心なのだろうか。

結論

このように、ダーウィンの性選択という観点からテキストを読み直してみると、バスシバの最終的なオウクの選択理由は、夫候補がもはやオウクしか残っていないということになり、二人の結婚はハッピー・エンドどころかアイロニカルな結末であることが分かる。また、バスシバの夫の選択

条件であった「飼い馴らし」についても、議論はあるが、夫として未熟なオウクは決してバスシバを飼い馴らしているとは言えない⁴。それは、テキストの最後でバスシバを「妻」と呼ぶことを学習している最中だとしてオウクが周りからひやかされていることから明らかである (*Far from the Madding Crowd* 464)。だが、バスシバにしても決して余裕のある性選択の勝者側だけにいるわけではない。事実、バスシバは、トロイをめぐる女性同士の争いにおいてファニーに対して敗北を経験していた。

以上、読み直しの結果、オウクとバスシバの結婚は、ダーウィンの性選択からするとアイロニカルな結末であり、またシェイクスピアの『じゃじゃ馬馴らし』に照らして見れば、オウクのバスシバへの夫としての未熟な態度は「飼い馴らし」のパロディとなり、これまでのハッピー・エンドという結論とは異なる新たな側面が浮かび上がってくるのである。

注

*本論文は JSPS 科研費(JP19K00425)の助成を受けた研究成果の一部である。

1. アーヴィング・ハウ(Irving Howe)も同様に、登場人物の定義について、共同体での仕事と土地の管理への態度を重視している (Howe 53)。

2. Penguin 版のテキストの注釈 (*Far From the Madding Crowd* 485) にもあるように、この髪の毛を切り落とす行為は、アレクサンダー・ポープ(Alexander Pope)の『髪の毛盗み』(*The Rape of the Lock* 1712-14)を示唆している。

3. スーザン・ビーゲル(Susan Beegel)は、この小説をハーディが「まれな、理想的な愛情を最大限に扱ったもの」(Beegel 209)と述べ、オウクとバスシバの結婚を「真のハッピー・エンディング」(Beegel 225)と論じている。

4. 「飼い馴らし」に関しては、シェイクスピアの『じゃじゃ馬馴らし』で、夫となるペトルーチオが定刻に結婚式に現れず泣きながら退場するじゃじゃ馬女性カタリーナが、オウクのカリフォルニア行きと雇用契約を断る手紙を読んで泣き出すバスシバと似ていると言えるかもしれない。実際に、カサグランデは、オウクがバスシバに話したカリフォルニアへの移住計画に「男性のファンタジー」である「じゃじゃ馬馴らし」の要素を読み取っている(Casagrande 68)。しかしながら、カサグランデは、バスシバが新たに身に付けた謙虚さや穏やかさの中に「昔のままの男性を魅了し、所有したい願望が隠されている」ことを指摘して

いる(Casagrande 68)。一方、ロバート・ラングバウム(Robert Langbaum)は、バスシバが最終的にオウクに頼りたいということを認識したとして、オウクがバスシバを飼い馴らしたと述べている(Langbaum 93)。

参 考 文 献

- Beegel, Susan. "Bathsheba's Lovers: Male Sexuality in *Far from the Madding Crowd*." *Modern Critical Views: Thomas Hardy*, edited by Harold Bloom, Chelsea House Publishers, 1987, pp. 207-226.
- Boumelha, Penny. *Thomas Hardy and Women: Sexual Ideology and Narrative Form*. The Harvester Press, 1982.
- Casagrande, Peter J. "A New View of Bathsheba Everdene." *Critical Approaches to the Fiction of Thomas Hardy*, edited by Dale Kramer, Macmillan, 1990, pp. 50-73.
- Daleski, H. M. *Thomas Hardy and Paradoxes of Love*. University of Missouri Press, 1997.
- Darwin, Charles. *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex (The Concise Edition)*, Selections and Commentary by Carl Zimmer, A Plume Book, 2007.
- *The Origin of Species*, edited by J. W. Burrow, Penguin Books, 1985.
- Hardy, Thomas. *Far from the Madding Crowd*, edited by Ronald Blythe, Penguin Books, 1985.
- Howe, Irving. *Thomas Hardy*. Weidenfeld and Nicolson, 1970.
- Langbaum, Robert. *Thomas Hardy in Our Time*. Macmillan, 1995.
- Shakespeare, William. *The Taming of the Shrew*, edited by Ann Thompson, Cambridge University Press, 2017.
- Williams, Merryn. *Thomas Hardy and Rural England*. Macmillan, 1974.
- 筒井 香代子. 「『はるか群衆を離れて』における結末に関する考察」『『はるか群衆を離れて』についての10章』(十九世紀英文学研究会編)、音羽書房鶴見書店、2017年、144-164.